〈研究ノート〉

『厚生新編』第十五巻「薬品抜萃 巻之上・巻之下」に関する覚え書き

寺田 智美

【キーワード】 『厚生新編』 エッセンチア アルター アメンドウ

1 はじめに

ショメールの家庭用百科事典 *Huishoudelijk Woordenboek*[1]の翻訳、『厚生新編』(1811～) には、〈第十五巻〉と〈続稿〉の一部において内容の重複が見られる。杉本 (1998) はこの重複箇所について、次のように指摘する。

> 『厚生新編』の稿本は全七十冊とされるが、のち、さらに三十二冊が追加された。仮に前者を〈A稿〉として後者を〈B稿〉とする。しかし〈B稿〉のうち、巻一～巻八・巻十二の九冊はそれぞれ〈A稿〉の巻七、巻八、巻十一、巻十二、巻十七、巻十八、巻二十八、巻七十の計八巻八冊と重複している。また、〈A〉で欠本とされた巻三十一と巻三十二は〈B〉の巻十、巻十一に当るもので、結局七十冊に二十一冊が加わり、〈A・B〉あわせて、九十一冊が全巻となる。[2]

また、〈第十五巻〉「薬品抜萃」の重複については、

> 既ニ訳校シタモノヨリ抜粋[3]

と述べている。

稿者はこの〈第十五巻〉に着目し、抜粋元との内容の比較を行った。その結果、〈第十五巻〉は抜粋元の文章を短く端折った箇所が若干あるものの、全編とおして元からほぼ忠実に抜粋を行っていることがわかった。

---

[1] 原著は仏文。*Huishoudelijk Woordenboek* は原著のオランダ語訳。

[2] 杉本 (1998)、51 頁。〈A稿〉と〈B稿〉の対応関係は以下のとおり。

〈B稿〉一巻 ← 〈A稿〉七巻	〈B稿〉二巻 ← 〈A稿〉八巻
〈B稿〉三巻 ← 〈A稿〉十一・十二巻	〈B稿〉四巻 ← 〈A稿〉十七巻
〈B稿〉五巻 ← 〈A稿〉十七巻	〈B稿〉六巻 ← 〈A稿〉十八巻
〈B稿〉七巻 ← 〈A稿〉十八巻	〈B稿〉八巻 ← 〈A稿〉十八巻
〈B稿〉十二巻 ← 〈A稿〉七十巻の一部	

[3] 前掲書、53 頁。

その一方で、項目名の示し方の異なっているものもいくつか見つかった。
本稿では、これらの比較の結果について報告する。

2　〈第十五巻〉と抜粋元との対応

〈第十五巻〉「薬品抜萃　巻之上・巻之下」は、巻名にも「抜萃」とあるとおり、〈第一巻～第十三巻〉までの項目から「効能」「薬効」について書かれた箇所のみを抜粋したものである[4]。

以下に〈第十五巻〉とその抜粋元との対応関係を示した。「 ← 」の後は抜粋元の所在を示し、項目名の示し方が異なっていたものについては、その項目名を明記した[5]。

〈第十五巻〉「薬品抜萃　巻之上」

- 葱　← 第一巻
- 落葉松耳　← 第一巻
- 猴猴　← 第三巻
- 竜涎香麝香の太陽煎の法
  ← 第五巻「竜涎香麝香の「エッセンチア」」
- 瑪瑙　← 第三巻
- 蝋石　← 第三巻
- 石麻　← 第三巻
- アンチモニー　← 第三巻
- 攀石並岩攀　← 第三巻
- 石脳油　← 第三巻
- 酢　← 第三巻
- 鰻鱺魚　← 第六巻
- 地栢　← 第四巻
- 白楊　← 第四巻
- アカヨウ　← 第四巻
- 花ヤスリ　← 第四巻
- 竜牙草　← 第四巻
- 耧斗菜　← 第四巻
- 木香　← 第四巻
- 蘆会　← 第四巻
- 黄瓜菜　← 第四巻

---

4 〈第十五巻〉には〈第十四巻〉からの抜粋は見られなかった。
5 『厚生新編』の引用においては、常用漢字に含まれるものについては通用の字体によるものとする。

〈第十五巻〉「薬品抜萃　巻之下」

- 白英　← 第四巻
- 茵蔯　← 第四巻
- アルター　← 第四巻「蜀葵」
- 巴旦杏　← 第四巻「孟桃」
- アンジャベル　← 第四巻
- アネイス　← 第四巻
- ルリハコベ　← 第四巻
- 鳳黎　← 第四巻
- 檳榔子　← 第五巻
- 亜臘皮亜愕模　← 第五巻
- 林檎　← 第五巻
- 白芷　← 第五巻
- 野西花苗　← 第五巻
- 蒿　← 第五巻
- 山櫨　← 第五巻
- 雪ワリ草　← 第五巻
- 鮒　← 第八巻
- 錦茘枝　← 第八巻
- バルセム　← 第九巻
- 続断　← 第九巻
- ブルードステーン　← 第九巻
- ユンギユエンチユム・バシリキユム　← 第九巻
- 羅勒　← 第九巻
- 熊　← 第十巻
- 甜菜　← 第十巻
- 伏牛花　← 第十巻
- 安息香　← 第十巻
- 箭鏃石　← 第十巻
- 樺　← 第十一巻
- ベルナジイ　← 第十一巻
- 蒟醤　← 第十一巻
- 狼把草　← 第十一巻
- 海狸香　← 第十二巻
- ペトニー　← 第十二巻
- 莞　← 第十二巻
- 鮓苔　← 第十三巻
- ビルセンコロイド　← 第十三巻

- 麦酒　　← 第十三巻

3　両者の比較

3.1　重複箇所

〈第十五巻〉が〈第一巻～第十三巻〉の一部をほぼ忠実に写していることについては、すでに述べた。違いとしては、文章を短くするための語の省略が若干見られた程度である。具体例をいくつか示しておく[6]。

■鰻鱺魚（うなぎ）

◎〈第六巻〉　鰻鱺魚（うなぎ）{和蘭「アアル」一名「パーリンギ」といふ。}

〈中略〉此魚の脂（あぶら）をとり、耳に点（さ）せば聾（つんぼ）を治す。又、痔痛（ぢつう）に塗（ぬ）りて、いたみを和らぐ。或は痘痕（ほうそうあと）につけて、其瘢（あと）を滅（めつ）す。又、毛髪を長生（のば）す。又、医家にて此魚の肝（かん）及び胆汁（たんじう*イノシル）をとりて、婦人難産に用ひて、至て効あることを称せり。又、此皮を塩蔵（しほづけ）にしたるもの、子宮に受けたる「シンキンゲン」{病名本条にみへたり}、又、子宮（*コツボ）脱出（＊ヌケタル）の症に用ひて、効あるひとつの秘法なりとせり。又、皮を焼て、子宮を薫（ふすぶ）るの法もあり。二法共に「ミカエル」といふ医師、実験を得る所の物なり。〈以下略〉

◎〈第十五巻〉　鰻鱺魚

脂ヲトリ、耳ニ点セバ聾ヲ治ス。又、痔痛ニ塗リテ、痛ヲ和グ。或ハ痘痕ニツケテ其瘢ヲ滅シ、或ハ毛髪ヲ長生ス。又、医家ニテ肝及ビ胆汁ヲトリテ、婦人難産ニ用ヒテ、至テ効アル事ヲ称セリ。又、此皮ヲ塩蔵ニシタルモノ、子宮ニ受ケタル「シンキンゲン」{病名本条ニ見ユ}、或ハ子宮脱出ノ症ニ用ヒテ、効アル一ツノ秘法トセリ。又、焼テ子宮ヲ薫ルノ法モアリ。二法共ニ「ミカエル」トイフ医師、実験ヲ得ル所ナリ。

■蒿（よもぎ）

◎〈第五巻〉　蒿（よもぎ）{羅甸「アプロタヌムマス」和蘭「アヘローネマンネチイ」又「アヘローネ」又「アヘリユイト」と名く。}

按に白蒿、青蒿、黄花蒿共に同種なり。

〈中略〉

苗葉主治、透徹（とうてつ*スキトホス）の性ある故に、能く閉塞（へい

---

6 『厚生新編』本文中の（　）は原文のルビ、{　} は細字双行、〈　〉は稿者の注を表す。清濁および句読点は稿者が適宜つけ、左側に書かれたルビは（　）内の＊の後に示した。また、踊り字は使用しなかった。

そく）を開き、粘稠（ねんてう）を薄（うすく）し、汚滞を浄（*キヨク）し、腐敗（ふはい）を防ぎ、或は月経を通じ、或は虫（むし）を殺す。其性功、大抵茵蔯と同じ。又、煎剤となし外用すれば、疥癬悪瘡を治し、又、小児頭瘡を淋洗して甚だ奇効あり。又、毛髪脱落する者にも効あり。此外、諸病に良効ありといへども、功能悉く経験試みざれば、爰に略せり。〈以下略〉

◎〈第十五巻〉　蕎（よもぎ）

按ニ青蕎、黄花蕎共ニ同種ナリ。

苗葉主治、透徹ノ性アル故ニ、ヨク閉塞ヲ開キ、粘稠ヲ薄シ、汚滞ヲ浄シ、腐敗ヲ防ギ、或ハ月経ヲ通ジ、或ハ虫ヲ殺ス。其性功、大抵茵蔯ト同ジ。又、煎剤トナシ外用スレバ、疥癬悪瘡ヲ治シ、又、小児頭瘡ヲ淋洗シテ甚ダ奇効アリ。又、毛髪脱落スル者ニモ効アリ。此外、諸病ニ良効アリトイエドモ、悉経験シ試ミザレバ、爰ニ略ス。

■麦酒

◎〈第十三巻〉　麦酒｛和蘭「ビール」と名く。羅甸「セレヒシア」又「ヒニュムホルデアセユム」拂郎察「デラビーレ」と呼ぶ。｝

〈中略〉

此物の性功ハ、第一、煩渇を潤し、身体を栄養し、元気を快爽にす。是等の主用のために造り設しものにして、欧羅巴洲の地方、殊に常用するなり。尤他洲に於けるも、此功用を以て服飲するなり。〈以下略〉

◎〈第十五巻〉　麦酒

第一、煩渇ヲ潤シ、身体ヲ栄養シ、元気ヲ快爽ニス。是等ノ主用ノタメニ造リ設シモノニシテ、欧羅巴洲ノ地方、殊ニ常用スルナリ。尤他洲ニ於ケルモ、此功用ヲ以テ服飲スルナリ。

3.2　項目名の示し方

項目名の示し方においては、次の三項目に違いが見られた。左が〈第十五巻〉、右が抜粋元の項目名である。

「竜涎香麝香の太陽煎の法」←「竜涎香麝香の「エッセンチア」」
「アルター」　←「蜀葵」
「巴旦杏」　←「孟桃（あめんとうす*あめんどう）」

以下、三項目の翻刻と「エッセンチア」「アルター／蜀葵」「巴旦杏／孟桃」各語に関するメモを記す。なお、翻刻中の波線は、〈第十五巻〉との重複を示すために稿者が付したものである。

■竜涎香麝香の太陽煎の法／竜涎香麝香の「エッセンチア」

◎〈第五巻〉 竜涎香｛羅甸「アムブラ」和蘭「アムベル」と名く。｝

主治、脳心胃を強壮にす。然れども、虚人・少年・婦人は用ゆる事なかれ。強て用れば、上気衝逆眩暈を発す。又、男子薫方の散薬となし、房術に用ひ、陽事を盛んにすといふ。服量内服一分六釐強より一銭三分強に至る。此物「エキスタラクト・チンキチユール」｛一名｝「エツセンチア」等の製方あり。

竜涎香麝香の「エッセンチア」｛即「チンキチユール」の法なり。｝
是を羅甸「チンキチユラ・レジア」和蘭にては「コーニングレーキ」「チンクチユール」と名く。

其方は灰色（*シラガイロ）、竜涎香六分六釐強、麝香三分三厘強を取り、共に合し、是に加那里亜（かなりあ）沙糖一銭を加へ、能々交和し、硝子罎に納め、扨「ウィツテブランドウエキン」｛火酒白色なるもの｝の強烈なる者、三十二銭を注ぎ入れて、一両日太陽煎、又は温煖なる所に置て浸出（*キヲヒキダス）す。是即ち「チンキチユール」なり。又、是を別の硝子器に注ぎ、固（かた）く封じて収め、貯へ用に供す。

此「チンキチュール」を少許の酒煎、又は他の液汁にて服用すれば、脳を強くして精気を壮にし、神思を悦楽す。又、他の飲液に一二滴を加ふれば、貴むべき芬香をなす。但し、婦人等、斯のごとき香烈の物を用ゆることなかれ。或は甚だ意を用ひて、少許を与ふべし。蓋「アムベル」は三種あり。一を「アムベルゲレース」｛ゲレーセアムベル｝｛〇銀白竜涎香｝、一を「ウィツテアムベル」｛白竜涎香｝、一を「スワルテアムベル」｛黒竜涎香｝と名く。又「ゲール（黄）アムベル」と称するものは、琥珀なり。「アムベル・ゲレイス」は、最も高価の物なり。乾枯軽虚色暗ふして、銀白芳香ありて、石の如く堅く片塊をなして大小は一ならず。大海大洋の中、又所々海辺の水上に浮むものを得るなり。

ウィッテアムベル」は、前品に比すれば色異に功力も又劣れり。

スワルテアムベル」は、特（ひとり）焚具商（かうぐや）取扱のみなり。

吾輩竜涎香の出所、起原（きげん*モト）を述たる諸説、ここに的当の事詳に載（の）せず。何となれば、其性おそらくは明白に知り難く、究理学にても一定して究め知りたきが故なり。

コロビウス」｛人名｝、諸家の考説十八等あることを挙たり。其中の説に、此品は蜜と蝋と混和せし物なりと。又、蜂海巌に蜜を醸し、漸く日の光輝に煎煮せられし物、偶々（たまたま）海中に落て遂に全く此形をなす後、波浪のために浜に打上らるるもの、人是を求め得るなり。

ペチユドレイ」といふ人、ピロソピセ・タランサクチエン」｛書名｝三百八十七条二百六十七葉にみえし説は、前説と全く反せり。是は、鯨魚の一種「カセロツト」といふ物の体中より生ずと。その生じ出たる物、海中に漂（ただよ）ひて、遂に此体質をなすといへり。此物宜しく其良好の品を撰むべし。

その良品は清潔にして能く乾き、裏に黒色なる細条（*ホソキスジ）あり。味は甘して芳しく、湿気ありて軟（やはら）かに汚穢なるは下品なり。除去るべし。細末となし、他の薬剤に加ふる時は、香気烈しく芬芳散漫するなり。

◎〈第十五巻〉　竜涎香

脳心胃ヲ強壮ニス。服量内服一分六釐強ヨリ一銭三分強ニ至ル。但シ、虚人・少年・婦人ハ用ユル事ナカレ。強テ用ユレバ、上気衝逆眩暈ヲ発ス。又、男子薫方ノ散薬トナシ、房術ニ用ヒ、陽事ヲ盛ンニストイフ。

竜涎香麝香ノ太陽煎ノ法

灰色竜涎香六分六釐強、麝香三分三釐強ヲ共ニ合シ、是ニ加那里亜沙糖一銭ヲ加エ、能交和シ、硝子罎ニ納メ、扨「ウィツテブランドウエキン」｛火酒白色ナルモノ｝ノ強烈ナル者、三十二銭ヲ注ギ入レテ、一両日日光カ、又ハ温煖ナル所ニ置テ浸出シ、別ノ硝子器ニ注ギ、固ク封ジテ貯エ用ニ供ス。

此太陽煎ヲ少許ノ酒カ、又ハ他ノ液汁ニテ用ユレバ、脳ヲ強クシテ精気ヲ壮ニシ、神思ヲ悦楽ス。又、他ノ飲液ニ一二滴ヲ加レバ、貴ムベキ芬香ヲナス。但シ婦人ハ、此ノ如キ香烈ノモノヲ用ユルコトナカレ。

「エッセンチア」は、『基本外来語辞典』では「エッセンティア[ラテン essentia]本質・精 現」として立項されている。『厚生新編』ではいくつかの項目で「～のエッセンチア」という下位項目を立てているほか[7]、〈第四十一巻〉「越仙 扶 亜（エッセンテア）」で、さまざまな物質から「精」を取り出す方法を集めている。「越仙 扶 亜（エッセンテア）」の下位項目二十三項目のうち、十八項目は「～エッセンツ」であり、また「～エッセンス」という語もみえる。

「～煎」「エッセンテア」「エッセンツ」「エッセンス」の使い分けについては、『厚生新編』の中のすべての使用例を検討した上で考察を加えたいと思う。

■アルター／蜀葵

◎〈第四巻〉　蜀葵｛羅甸「アルタア」和蘭「へームスト」と名く。｝

此草茎を抽（ぬ）くこと高く、葉は大にして濶（ひろ）く、糙渋（ざらつき）欠刻（きれこみ）あり。其末は漸々（だんだん）尖る。花は淡紅、或は浅象牙（*ウスガキ）色のものあり。子仁は錦葵（たちあふい）の子に似たり。

和蘭並にホウゴ・鐸乙都（どいつ）・諳厄利亜（ゑんげらんど）・拂郎察（ふ

7 例えば〈第二十六巻〉「箘桂」の下位項目「桂の「エッセンチア」製法」、〈第二十八巻〉「枸櫞樹」の下位項目「枸櫞「エッセンチア」を製するの法」等がある。

らんす)、其他諸洲の湿地自然に生ず。又、薬用に供する為に、園圃にも培養す。三四月｛我二三月也｝に根を分ち植れば、よく長育す。又、これを苗床に植るに、各一尺五寸、或は二尺許を隔つべし。

効能

根・葉・子・仁、共に軟和緩柔せしむるの性功あり。内服外敷共に効あり。或はこれを内服せしむれば微利を取り、或は諸痛を止め、又、酷厲液を和解す。故に咳嗽険症、或は胸肺咽喉不利、薮痛（ゑこきようにいたむ）、或は石痳劇痛、或は熱尿痛、或は肺癰焮痛、其他諸部の焮腫痛、或脇痛（*プレウリス）等、皆良効あり。

根・葉・仁共に煎湯となし、或は潅剤（*キライダスホウ）となして内服せしめて佳なり。

根・桂皮を和し、其量に適するの水を以て煮、服用すれば、よく子宮を清潔にし、胞衣（*エナ）を下し、並に悪露を駆逐す。外用して諸疫の疼痛を緩和し、諸腫瘍を軟化し、且膿熟を催さしむる等、甚だ効あり。又、搨方（むしぐすり）、糊搨方（のりむしぐすり）、其余脚湯（*フートバツテン）となし、各症に施して亦同く効験あり。畢竟此草は、前説のごとき性効あるが故に、右に説けるの諸症並に其他の類症、悉く応用して効を取らざるものなしと。薬局にては、此物を舎利別（*セイロープ）に製し、専ら胸肺の諸病に毎（つね）に与るなり。又、軟膏に製し用ゆるものあり。これを「ユングエンチュム・アルテア」と名く。

◎〈第十五巻〉　アルター｛アホイ」の一種｝

根・葉・子・仁、共ニ軟和緩柔セシムルノ性功アリ。内服外敷トモニ効アリ。内服セシムレバ微利ヲ取リ、或ハ諸痛ヲ止メ、又、酷厲液ヲ和解ス。故ニ咳嗽険症、胸肺咽喉不利、薮痛（エコキヨウニイタム）、石痳劇痛、熱尿痛、肺癰焮痛、其他諸部ノ焮腫痛、脇痛等、皆良効アリ。

根・葉・仁共ニ煎湯、或ハ潅剤トナシテ、内服セシメテ佳ナリ。

根ニ桂皮ヲ和シ、其量ニ適スルノ水ヲ以テ煮、服用スレバ、ヨク子宮ヲ清潔ニシ、胞衣ヲ下シ、悪露ヲ駆逐ス。外用シテ諸疼痛ヲ緩和シ、諸腫瘍ヲ軟化シ、且膿熟ヲ催サシムル等、甚ダ効アリ。又、搨方、糊搨方、其余脚湯トナシ、各症ニ施シテ亦同ク効験アリ。

『基本外来語辞典』には

アルター[オラ/シタ altha]〔植物〕たちあおい 例「遏爾託亜（アルタア）」宇田川榛斎『遠西医方名物考Ⅰ』1822 江

とあるが、『厚生新編 別巻 索引』では、「蜀葵」を「たちあおい」の異名である「つゆあおい」と読ませている。斎藤（1967）は「アルター」

を

Althaea　アルターと音訳して遏爾託亜などの漢字を当てた。蘭学経由の[D.]で、[D.]ではHeemstという。〈以下略〉

と説明し、「アルター」を掲載している文献をいくつか挙げているが、それらはいずれも、蘭学に関連する文献に限られているようである[8]。「アルター」は、少なくとも蘭学者の間では広く認知されていた語だと思われる。

■巴旦杏／孟桃

◎〈第四巻〉　孟桃（あめんとうす*あめんどう）｛羅甸「アメイグダリユス」和蘭「アマンデル」と名づく｝

此樹は園庭に培養す。其葉及び花も、全く桃に似たり。春月花咲き、花謝（*オチル）して実を結ぶ。実の形長めにして硬（かた）きこと、木のごとし。表に灰緑色の皮覆ふ。其実内の仁は、所謂「アマンデル」と呼ぶものなり。

此物、其味甘苦二品を為す。故に分ちて二種とし、甘孟桃・苦孟桃の名あり。

拂郎察（ふらんす）に属するの一州「アヒグノン」の所在に産するもの、美好なり。故にこれを貴む。

按に、我邦舶来の巴旦杏を「アメントウ」と呼ぶ。この「アマンデル」の訛転（あやまり）と見ゆ。別に「アメンドウ」といふ小木あり。これは、其種自ら別品にして寿星桃なり。「アマンデル」真種の此方に出すことは、未だ聞ざる所也。漢土に巴旦杏の名あるものは、巴旦島より種子を伝たる故の名なるべし。

甘孟桃、軟-和緩-柔の性功あり。凡そ諸閉塞を開通し、殊に胸病に良効を奏す。且小便を通利す。毎日乾-蒲-桃と共に和し食すれば、身体を滋養し、血液の汚濁を清-澄して良血を生ず。

世に多くこれを取て、孟桃乳剤といふものを製す。性油気尤多し。

孟桃樹を培養するの法

---

8 斎藤（1967）本論10頁。[D.]はオランダ語のこと。斎藤は「アルター」を掲載している文献として、*E.Buys, vol. I*（1769）、『厚生新編』（1811）、『遠西医方名物考』巻16（1822）、『増補重訂内科撰要』巻5（1822）、*Verzameling*（1834）、『泰西薬名早引』下（1837）を六冊を挙げている。この他にも『和蘭用薬便覧』（1837）、『改正増補蛮語箋Ⅰ』（1848）、『法爾密里児』;『客中案証』（1850以前）にも「アルター」が収録されているという（『角川外来語辞典』による）。

此樹、吾国にては、専ら嫩（わか）き梅樹の小幹に接枝（つぎほ）して養ひ立つ。植るに軽疎（*サラサラスル）の良地、砂石の多して腹肥（*コヘタル）の地、又、温暖にして日のよくあたるの地を好む。尤冬月はよく覆ひ、寒気を防ぐべきの処を撰び、植るを肝要とすべし。但し、吾国の気候にても、右のごとくに為すときは、頗るよく長育すといへども、実は熟するに至らず。多くは実を生ずることなく、たとへ生ずるとも甚だ少し。此木は早く花開くによつて、寒気に凋落（てうらく*シボミオツ）するがゆへなり。

其油を取るの法

先、此物を取り、温湯に浸し、硬皮（かたきかわ）を剥（は）ぎ去り、綿布にて拭ひ、よく乾し、石臼に入れ、木の杵にて細に搗き砕（くだ）き、泥（でい）となし、布袋に入れ、搾（しめぎ）にかけ、徐々（そろそろ）に絞り出す。尤、火に焙（あぶ）ることはなきなり。此法に由るときは、火気を仮（か）らずして、其油を製し得るなり。此油、内服方に充（あ）て用て、尤良なり。

此油の精好なるものを得んと欲せば、陳旧なるものか、又、苦孟桃仁等の混交することなき様に心を用ひ、尤新鮮の品を撰み取り、皮殻をよく剥（は）ぎ去る事に、宜く意（こころ）を注（つ）ぐべし。これ何となれば、皮殻は稍（やや）渋-濇の性あるもの故、若し混雑することあれば、其油純粋（*キツスイ）ならずして、軟和の主功も劣れるを以てなり。

皮を去るに、熱湯に浸すの法を用ひずして、水に浸して剥ぐの法あり。其法は、先此物を取り、冷水中に投じ、浸すこと三時なるときは、手にて容易く其皮剥ぎ去らるる様になるなり。さて、其後一時半、或は二時許も綿布の間に入れて、乾すべし。而後、これに麦の糠（ぬか）を交て、鍋に入れ、火に上せ、手にてかきまはすときは、其温気にて皮殻破裂して、両つに割れるなり。これを度（ほど）として、篩にて其糠をふるひ去り、新しき麁なる布袋に入れて、是を磨（す）り揉（も）めば、其残れる皮も盡く除くなり。猶、其内皮の黄色黯赭（あんしゃ*くりいろ）を為すものをよくとり盡すべし。此膜皮（*うちかは）味辛く、軟脂質の性あり。故に、これを連ね用るときは、咽喉燃痛を起すものなればなり。

凡そ此油を絞り取るには、必しも烈しく搾（し）めて一時に取んとすることなく、徐緩（そろそろ）になすべし。如此すれば、其得る所の油、清澄（せいてう）をなすなり。若これを急速にするときは、其油濁りて其性功も良ならず。服用するも亦、味佳ならざるなり。

「メシュエ」{人名}の説に、火気を仮りて此油を取るは、皮殻を去りたる孟桃仁を、二-時-半許り温暖なる所に置か、又、半時許、湯の上、或は灰火の砂火の上に置て取るべしとなり。然れども此法は、初にいふ所の法に比すればよろしからずとす。如何となれば、斯のごとく此物を熱せしむれば、油の平和なる本性、卒（には）かに性-熱煆（や）くが如くなる物と変ずる

に依て、其軟和緩柔の性効、乍ち化して火熱のものとなればなり。故に、初に挙るの法を取り用ゆべし。「メシュエ」の法は薬局（*セイホウヤ）にても用ひず。初の法を用る也。

苦孟桃、閉塞を開通し、粘-稠-液を稀薄にす。且小便を通利す。尤其効、甘-孟-桃よりは通利の功勝れり。

或人曰、醒（さかやよひ）を解す。過酒する時、此物を食へば、速に其酔を解くと也。

皮殻を去り摩（す）りて額に貼すれば、頭痛を緩む。凡そ内象の汚滞を清潔にす。諸脉支別細絡の壅塞するものを開利す。故に、其閉塞に起原し来る所の脾痛、腎痛及大腸痛等を治す。又、食を進め、月経を通じ、従て小便も快利す。苦孟桃を用ゆべきの時、これを闕くことあれば、茵蔯・桃仁・ケルス仁｛此方の桜の仁｝の内を代用して可なり。

油を取るの法

能く乾くものを撰取り、猶これを丁寧に清浄ならしめ、石臼に入れ、木杵にて搗て泥となし、少し温め、それより布袋に盛（も）り、搾（しめぎ）にかけて油を取るなり。火温を得れば、其温煖の助けによつて、其含蓄する所の油質の液汁、融化稀解（ゆうくわきかい*トケホゴレ）して、よく別に流滴すれば也。

此等の類を温むるの法は、先これを硝子罎に入れ、壺或は罐子に熱湯を貯へ、火上に按し、其罎を湯内に浸し温むるなり。如此なす時は火に触れず、且水の交ることもなきがゆへなり。

甘孟桃油、咽喉及肺、或は腎等に痼（こ）するの酷厲液を、緩解宣和す。又、これを外用するものは、軟緩和柔の功あり。故に、支節並に其他諸部の堅硬腫、又、其枯燥拘急するものは緩和す。右、初に挙るの諸症には、胸肺病の主薬とする舎利別（せいろうぷ）方の中を加へ用ゆべし。

苦孟桃油、耳嚮蝉鳴を治し、肝臓並其余の諸臓壅塞するものを開通して、稀解清刷す。又、能各部、諸般の堅硬腫を化し、尤神経牽急を軟和にす。

〈以下、其皮を去るの法・孟桃乳の製法・孟桃糊剤を製するの法・孟桃酪を製するの法・本国産嫩緑の孟桃を糖漬するの法・炙孟桃（*アブリアメンドウ）の製法・纏果糖（こんぺいとう）となすの法・銀白色の糖漬（さとうづけ）にするの法・紅色の糖漬となすの法・氷凍孟桃（こほりあまんでる）を製するの法・桂纏桃（*ニッケイイリノコンペイトウ）の法・炙孟桃の別法・タールト」孟桃の法・アモウレウシース」の製をなすの法、と続くが省略する。〉

◎〈第十五巻〉　巴旦杏

甘巴旦杏ハ、軟和緩柔ノ性功アリ。凡ソ諸閉塞ヲ開通シ、殊ニ胸病ニ良効ヲ奏シ、且小便ヲ通利ス。毎日乾蒲桃ト共ニ和シ食スレバ、身体ヲ滋養シ、

血液ノ汚濁ヲ清澄シテ、良血ヲ生ズ。

苦巴旦杏ハ、閉塞ヲ開通シ、粘稠液ヲ稀薄ニシ、且小便ヲ通利ス。甘巴旦杏ヨリハ、通利ノ功勝レリ。

或人曰、過酒スル時、此物ヲ食エバ、速ニ其酔ヲ解スト。

皮殻ヲ去リ摩リテ、額ニ貼スレバ、頭痛ヲ緩メ、凡ソ内象ノ汚滞ヲ清潔ニス。諸脉支別細絡ノ壅塞スルモノヲ開利ス。故ニ、其閉塞ニ起原シ来ル所ノ脾痛、及大腸痛等ヲ治ス。又、食ヲ進メ、月経ヲ通ジ、従テ小便モ快利ス。苦巴旦杏ヲ用ユベキノ時、コレヲ闕クコトアレバ、茵蔯・桃仁・ケルス仁｛此方ノ桜ノ仁｝ノ内ヲ代用シテ可ナリ。

甘巴旦杏油、咽喉及肺、或ハ腎等ニ痼スルノ酷厲液ヲ緩解宣和ス。又、外用スルモノハ、軟緩和柔ノ功アリ。故ニ、支節並ニ其他諸部ノ堅硬腫、又、枯燥拘急スルモノヲ緩和ス。右、初ニ挙ルノ諸症ニハ、胸肺病ノ主薬トスル舎利別方ノ中ヲ加エ用ユベシ。

苦巴旦杏油、耳嘯蝉鳴ヲ治シ、肝臓、其余ノ諸臓壅塞スルモノヲ開通シテ、稀解清刷ス。又、能各部諸般ノ堅硬腫ヲ化シ、尤神経牽急ヲ軟和ニス。

「あめんとうす・あめんどう」は「アーモンド」のことで、一般的には「巴旦杏」もしくは「扁桃」と表記する。しかし〈第四巻〉「孟桃」では、按文の中に「巴旦杏」という表記が見えるものの、本文自体は「孟桃」で統一されている。ほか、〈第二巻〉「咽喉腫」に

アマンデレンは咽喉の両傍に自ら泡起（*フクレアガリ）をなす物の名なり。｛按ずるにアマンデレンは原孟桃（*アメンドウ）のことなり｝

とあるが、ここもやはり「孟桃」と表記されていた。では「扁」という漢字自体が使われていないのかといえば、そうではない。例えば「扁蝨（ダニ）」[9]や「扁栢（*ひのき）」[10]のように、本文中に「扁」という漢字を確認することができた。

「扁桃」に「孟」の漢字を当てるのは、『厚生新編』あるいは蘭学関係の文献に限ったことなのかどうか。『厚生新編』の語彙や表記を調査していく際、留意しておきたい点である。

4　おわりに

以上、『厚生新編』第十五巻「薬品抜萃　巻之上・巻之下」とその抜粋元を比較した結果と、その作業の過程で気づいた点について、簡単に述

9 「扁蝨（ダニ）」は〈第二十七巻〉「コーセニリイ」の本文中に見られる。
10 〈第三十巻〉に「扁栢（*ひのき）」が項目として立てられている。

べてきた。

結論としては、両者の間には内容に関わるような大きな相違点は見られなかったわけだが、それならばなぜ、内容が重複しているにもかかわらず、わざわざ〈第十五巻〉を設ける必要があったのかという疑問は残る。これは『厚生新編』の成立事情や背景に関わる問題であり、別に調査が必要であろう。

『厚生新編』は杉本（1998）も述べているとおり、「広くヨーロッパの文化・学芸の翻訳を一つにまとめ、多くの近代日本語となった訳語を蔵する宝庫」[11]である。しかし今現在、『厚生新編』の全語彙を網羅した索引は整っておらず、語一つ検索するにも完璧を期せない状況にある[12]。

今後はより完全な検索の可能性についても視野に入れつつ、『厚生新編』に見られる各種語彙の調査を進めていきたい。

【参考資料】

〈影印〉『静岡県立中央図書館蔵 厚生新編 全5巻別巻1』恒和出版 (1978-1979)

〈翻刻〉貞松修蔵編『厚生新編』静岡 厚生新編刊行会（1937）

【参考文献】

あらかわそおべえ（1977）『角川外来語辞典　第二版』角川書店

石綿敏雄編（1990）『基本外来語辞典』東京堂出版

斎藤　静　（1967）『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』篠崎書林

杉本つとむ（1998）『江戸時代西洋百科事典 『厚生新編』の研究』雄山閣

追記：本稿は、早稲田大学特定課題(課題番号 2000A-241)の研究成果の一部である。

（てらだ ともみ／文学研究科日本文学専攻 研究生）

---

11 杉本（1998）90頁。

12 現在、『厚生新編』の索引には、恒和出版『厚生新編』の別巻『索引』と、杉本（1998）の巻末索引の二種が存在するようである。前者は項目名を中心に主要な名詞類を集めた索引、後者は新たに翻刻し直した『厚生新編』の一部分の索引である。